

《深山祖谷山》no.115 (1993)

合唱 A

- (1) 耶蘇宗門といへるは、南蛮西戎のおしへにいて、そのかみ来舶ともがら、伝えひろめ侍りけるが、神をなみし仏をないがしろにし、あをひとぐさをまどはず害ありける異法なりとて、公よりいたく制止給ひけれど、猶その余党国々におちとどまりて、犯すものあるぞとて、切支丹にあらざるよし、年氣請する公の令法也けり。ことし此事を掟侍らむとて、徳島を立出で、治めし所をめぐる。
- (2) 祖谷は縦十三里、横七里がほど、まことにあらぬ世界とおぼへて、見も知らぬ小草の花の色いみじきが咲きたり。熊・野猪・鹿・霊羊・狼など、さはにすめり。道しるべする徳善なにがし、獵をこのめるよし、「いのしをいくらばかり得つるや」ととひ侍れば、「それはおぼへ侍らず。熊の数はおぼへて候。六つか七つえて侍り」といひけり。
- (3) 今久保名などうちすぎで、田の窟名より大窟名にわたるかづら橋を見る。祖谷の山に、かづらばしかけたるところ、九ヶ所侍るが中に、長く大なるは此橋なりとぞ。下は祖谷川といふ谷川のながれにて、水底まで三十三尋ありとなむ。見ればめくるめき、見ずしてはしき綱をさだかにふみがたし。
(大田信圭『祖谷山日記』)

合唱 B

(遠くの呼び声)「ほうい、ほうい」

a. 木挽き唄〔男声〕

木挽きさんらは根性が悪い 仲のよい木を挽きわかるよ
根性悪うても挽かねばならぬ 命かけての職じゃもの
木挽きゃこんびき根さえよけりゃ 白いママ食うて金残すよ

b. 田植え歌〔女声〕

菅の笠着て畦ぬるとのによ かけてあげたい玉禪よ
五月三十日や早乙女よ あとの六月あただ女子よ
ここで寝ましょか植え田の中でよ 畦を枕に稲寝敷きよ

c. こえかり節〔男声〕

川の向かいの殿持ちゃよかる はいりゃ後みる出りゃ招く
後みる後みるはいりゃ はいりゃ後みる出りゃ招く
下へ下へと出てこそよかる 何がよいでよ山奥を
よいでよよいでよ何が 何がよいでよ山奥を
小屋はよいものいつ行ってみても 今宵泊まりて明日去ねと
泊まり泊まりて今宵 今宵泊まりて明日去ねと

d. こえかり節〔女声〕

四万十川の落合よりも 阿波の鳴門が物凄い
鳴門が阿波の 鳴門が物凄い
祖谷の葛橋やくものよの如く 風もないのにゆらゆらと

ないのに風も ないのにゆらゆら揺れる
主と手を引きゃこわくない

第二章

合唱A

(1) 閑定名といへる所より、戸越坂といふをのぼる。この坂ことの外とをくて、越えわびたり。

からうじてとうげにいたる。是より東祖谷といへり。おほくおほみ草をうへたり。山藍もところどころに見ゆ。高き峯にも、やいはた侍り。岩津滝のさかしきあり、人もかよはぬ所にて、驚くまたかななどの巢くふところとなん。

(2) 阿佐名といへる所の、阿佐佐馬乃助のもとにやどれり。家あるじは、従二位中納言平教盛卿の二男、従四位越後守国盛朝臣、八島の浦の戦をさけて、この山におち留りていまそかりしが、承元二年卯月十日なくなり給ひ、法名定福寺殿順照道義といへり。墓は石をつみて櫓をうへたり。

この家に軍の旗ふたながれあり。大旗は白ききぬ、赤ききぬ段々にて、うへに八幡大菩薩とかけり。むかひ蝶の紋あり。年経りなえばみたるが、赤きはうつろひてくるみたり。

(大田信圭『祖谷山日記』)

合唱B 朗読(祖谷太鼓)

八島にはひまゆく駒の足早うして正月(しょうぐわっ)もたち、二月(にぐわっ)になった。春の草暮れては秋の風に驚き、秋の風が止(よ)うでは春の草になり、送り迎えて三年にもはやなつた。同じ十四日に、範頼も平家追伐(ついばっ)のために、七(しち)百余艘の船に乗って、神崎(かんざき)という所から発向せられ、義経も二百艘余りの船に乗って、渡辺(わたなべ)から南海道(なんかいどう)へおもむかるが、風古木(こぼく)を折って吹くによって、波蓬莱(ほうらい)の如くにふきたって、船を出すには及ばなんだ。夜(よ)に入(い)って義経物の具どもはこばせ、馬ども乗せて、船出せとおほせらるれば、楫取(かんどり)ども叶(かの)うまじい由を申せば、義経怒って、その儀ならば、しゃつばらいちいちに射殺せと(おお)仰せらるれば、矢にあたって死ぬるも同じこと、風が強くは馳死(はせじに)に死ねと言うて、二百艘余りの船のうちにただ五艘ばかり出(だ)いた。

〔義経〕 「船ども篝(かがり)たいて敵に船数(ふなかず)見するな、義経が船を本船(もとぶね)にして、篝(かがり)を守れ」

と取楫(とりかじ)おも楫に馳(は)せ並(なる)うでゆくほどに、おすには三日(みっか)に渡るところを、ただ三時(みとき)に阿波の勝浦(かつら)についた。義経、親家(ちかいえ)を召して、

〔義経〕 「さて、屋島の城の様体(ようだい)は何とあるぞ？」

〔親家〕 「そのおことじゃ、城は無下〔無碍〕に浅間(あさま)にござる、塩の干(ひ)まらする時は、馬の腹もつからぬと申す」

〔義経〕 「さらば寄せい」

とあって、頃は二月(ぐわっ)十八日のことなれば、けあげたる塩のしだらうだ中からうち群がっ

て寄せたれば、平家は運がつきたか、大勢と見ないた。

〔平家の兵ども〕 「これは何事ぞ？これは何事ぞ？」

「あわ敵が寄せたぞ」「急いでお船に召されい」

と言うて、磯にあげおいた船どもを俄か（にわか）に押しおろいて、一門みな船に取り乗って、一丁ばかり押し出（だ）いた。義経は総門（そうもん）の前で名のらせらるれば、嗣信（つぎのぶ）、忠信、渋谷、やうやうとして

つくりたてた内裏（だいり）や、御所に火をかけて片時（へんし）の煙とないた。

大臣殿（おおいとの）これをご覧（ろう）ぜられて、能登殿（のとどの）はおじゃらぬか？

一軍（ひといくさ）召されいとあったれば、能登殿二百人ばかりで同じ渚（なぎさ）へ上がらるれば、越中（えっちゅう）の次郎兵衛（じろうびょうえ）が進み出（で）て申したは

〔次郎兵衛〕 「けふの源氏の大将はたそ？」

伊勢の三郎が申したは

〔伊勢の三郎〕 「こともかたじけなや、清和天皇（てんおう）のお末判官（ほうがん）殿ぞ」

〔次郎兵衛〕 「それは金商人（かねあきうど）が所従（しょじゅう）じゃな？平治には父義朝は討たれ、母常磐（ときわ）のふところにだかれて、ここかしこを迷ひ歩いたを清盛入道殿（きよもりにゅうどうどの）たづね出させられたれども、幼ければ、不憫（ふびん）などあって、捨ておかせられたほどに、鞍馬（くらま）の寺に十四五までいたが、商人（あきうど）の供をして奥（おく）に下（くだ）った者でこそあれ」

〔伊勢の三郎〕 「汝（なんじ）は砥波山（とみやま）の軍（いくさ）にからい命を生きて、乞食（こつじき）の身となって、京へ上（のぼ）ったは何ぞ」

〔次郎兵衛〕 「汝（なんじ）も鈴鹿山（すずかやま）の山が津よ」

と申したれば、金子の十郎、雑言（ぞうごん）はたがひに益（えき）ない。去年（きょねん）の春一の谷で武蔵相模（むさしさがみ）の若殿ばらの手なみはしつらうと申し終らねば、弟の与一（よいち）よっぴいて射る。次郎兵衛（じろうびょうえ）が胸板（むねいた）うらかくほど射させて、そののちはことば戦（たたか）ひはせなんだ。

（天草版平家物語 卷第四第十六）

第三章

合唱A

（１） 祖谷川といへるは、菅生のおく名頃といへるかたより流れ出る。源はつるぎの御山といへり。剣権現とておはします。伊予の高ねにをとらぬ高き山にて、いただきに高さ十三丈ばかりのいはそびえたり。是を御神体とあがめまつる。

中の瀬の端といへる所まで、喜多・阿佐・久保・菅生・集福寺、をのをのをくり来れり。しばしかたらひ馴にし旅の名残いとわりなし。

（２） 露霜もわけて深山のおくなれや

にしきをあらふ谷のもみぢ葉

(大田信圭『祖谷山日記』)

合唱 A / B

(2) おもひきやみ山のおくにすまゐして
雲の月をよそに見むとは

(平家物語「大原御幸」)

合唱 B

a. 粉ひき節〔女声〕

粉ひき婆さんお歳はいくつよ わたしや挽き木とおないどしよ

サアヨイヨイヨイ

粉ひけ粉ひけと挽かせておいてよ 荒い細いのなしょたてるよ

サアヨイヨイヨイ

粉ひき婆さん唄なと歌えよ いろ粉かむかと思われるよ

サアヨイヨイヨイ

白よ舞え舞えいろ粉よ走れよ かどに立つ殿夜にふけるよ

サアヨイヨイヨイ

つらいことぞよこの子がなけりゃ いんで二度花咲かすのによ

サアヨイヨイヨイ

b. エイコノ節〔男声〕

エイエーイエイエイエイヤ エイコノイカニ

殿の御門エイヤ お池をついて

水が湧くかと眺めておれば 水が湧かずに酒が湧くショーライ

エイエーイエイエイエイヤ エイコノイカニ

あなたのお家はエイヤ 栄えるはずよ

旦那大黒奥様えべす 一人ある子が福の神ショーライ

c. 手まり歌〔児童もしくは女声〕

よその子供はかしこい利口い

川に流れたおくずをひろて 踏んで紡いでかせばにかけて

七つなからのおさ買を入れて 細いちきりこきりりと巻いて

機にこっきゃげて チャッキリ子と織って

なにに染めぞとせじろに問えば 梅に驚むらむら雀

羽がいそろえて飛ぶところ